

生駒翠山の絵葉書
(京田辺市所蔵)

生駒翠山絵葉書のリスト
(京田辺市所蔵)

番号	年月日	内容
1	S2.11.12	画房の屋根と山
2	S2.11.16	蜂の巣
3	S2.11.20	コクマカキ(枯れ枝拾い)
4	S2.12.3	ざくろ
5	S2.12.15	唐がらし
6	S2.12.19	松
7	S2.12.23	牛蒡
8	S3.1.5	画房の北面
9	S3.1.11	画房の南方
10	S3.1.15	娘(妙子)
11	S3.1.20	翠山宅西方
12	S3.1.30	頬白鳥の巣
13	S3.2.11	娘と団子山
14	S3.2.13	クマン蜂の巣
15	S3.2.29	梅
16	S3.3.3	翠山宅
17	S3.3.4	翠山宅
18	S3.3.10	竹と梅
19	S3.3.19	採蘭
20	S3.3.29	つくし
21	S3.4.3	たんぽぽ
22	S3.4.5	杏
23	S3.4.10	文章のみ(引越通知)
24	S3.4.15	翠山宅前の山
25	S3.4.25	小魚
26	S3.4.25	雀の子
27	S3.5.6	自宅への案内図
28	S3.5.19	たんぽぽ
29	S3.5.29	夏蜜柑の花
30	S3.6.5	翠山と娘
31	S3.6.9	文章のみ(螢火の野道)
32	S3.6.15	田植え
33	S3.6.21	朝顔
34	S3.6.22	翠山宅前の田
35	S3.7.2	モツ
36	S3.7.8	ドグロ
37	S3.7.13	田甫の情景
38	S3.7.21	小鳥
39	S3.7.31	西瓜畑
40	S3.8.15	お盆(坊さん行脚)
41	S3.8.24	野萩
42	S3.8.27	アケビとバッタ
43	S3.9.10	トマト
44	S3.9.17	頬白鳥
45	S3.9.21	親子(抽象画)
46	S3.9.28	落栗
47	S3.10.5	虹
48	S3.10.10	きんもくせいと雲雀
49	S3.10.20	ざくろ
50	S3.10.31	山茶花
51	S3.11.6	夜警
52	S3.11.9	龍膽
53	S3.11.14	田舎の奉祝の賑わひぶり

54	S3.11.21	山柿のつるし干し
55	S3.11.27	奉祝の提灯行列
56	S3.12.12	獅子
57	S3.12.17	冬の田
58	S3.12.25	娘のオカゲオドリ
59	S4.1.15	トンド
60	S4.2.1	翠山宅の東縁
61	S4.2.23	ゲンゲ(レンゲ)
62	S4.2.24	河豚
63	S4.2.29	山と里
64	S4.3.11	藪椿
65	S4.3.21	梅
66	S4.4.29	ツツジか
67	S4.5.23	きんぼしげ
68	S4.5.29	茶摘みの帰り
69	S4.6.12	水田など
70	S4.6.18	麦刈り入れ前
71	S4.6.23	牛での耕作
72	S4.6.28	茅葺の家
73	S4.7.11	娘と鴉
74	S4.7.19	巴旦杏(すもも)
75	S4.7.30	奈良公園の鹿
76	S4.8.13	目白
77	S4.8.29	馬追虫(キリギリス)と蚊帳
78	S4.9.6	川沿いを歩く姿
79	S4.9.15	翠山の菜園
80	S4.10.2	猿取茨
81	S4.10.5	落山栗
82	S4.10.23	多々羅集落入り口
83	S4.11.15	門前の細道
84	S4.11.25	稲掛け
85	S4.12.17	四十雀
86	S4.12.26	川での大根洗い
87	S4.12.30	枝に積もる初雪
88	S5.1.1	午年の年賀状
89	S5.1.2	晴着姿の娘
90	S5.2.15	梅
91	S5.2.25	山麓と蝶
92	S5.3.6	つくし
93	S5.3.17	老人による籠の手入れ
94	S5.3.31	竹林
95	S5.4.3	井出の山吹山
96	S5.4.24	山と里
97	S5.5.8	茶摘み遠景

NO.1~10

部便はがき



京都市下京町
油小路北七路御
齊藤達介先生

信下都賀郡
三ツ山本村
三ツ山

山崎先生のついでに、
を聞きしころの、た、出立の、
漢大の、御書を、
御有りなれども、
山崎先生、
まさ、
先生を、
こを、
の、
亦、
二軒を、
まり、
の、
二、
山、
山崎先生へ、
お、

十一月十日
三ツ山



郵便便



高都市下京道
油ヶ谷小石路角

高野村連介先生

京三山本利子

南山梅子

木のてらに巣をつくる
 おんあしはあつた
 ちいさなまごを
 かくすところ
 ちいさなまご



三月十六日
 三山不石宗南
 山



郵便はかき



京都布下京邑
油小路北小路角

齋藤圭介先生

三山本村字子南山

20
外山

木柵しか出来きした
 掃一もふも子孫の故り
 おとしまいた
 柵も下敷が黄ばんで
 ままいた
 下の屋敷のくさか水柵
 を掃なろりに来ります
 この辺はここのり
 コマをかくと云々
 風が吹く日は賣る道
 山のコラマが、が軒先
 赤いも出しちがら
 八のう下と直ります
 川生
 つい
 も平
 和ん
 リ



郵便便所



白都市下京区油
小浪北小浪角
齋友在分生

三山木
町
おら子

ゆいばいり

高りりし

一は二霜とま

リたお山

つみ洞

しりした

竹菰

りか狸

目立ち

帝名

したぬ



ガキ

出

え

の

は

は

は

は

は

は

は



郵便はか

京都市下京区
油小路少路

齋藤 甚介

角

先生

京都府
京都市

又かあるに信々たる
リからに予りりた
年未の風山の甲へ
も吹そあるの方
もせか車ていよを
良のものがあつた
いれものわけをす
念内り少いし高ふ
おもこわりてん
二重 亭 辰
通し見ずにし
まのりしむ

辛きふ

唐がらし

ちがひ

もろき



三月廿五日

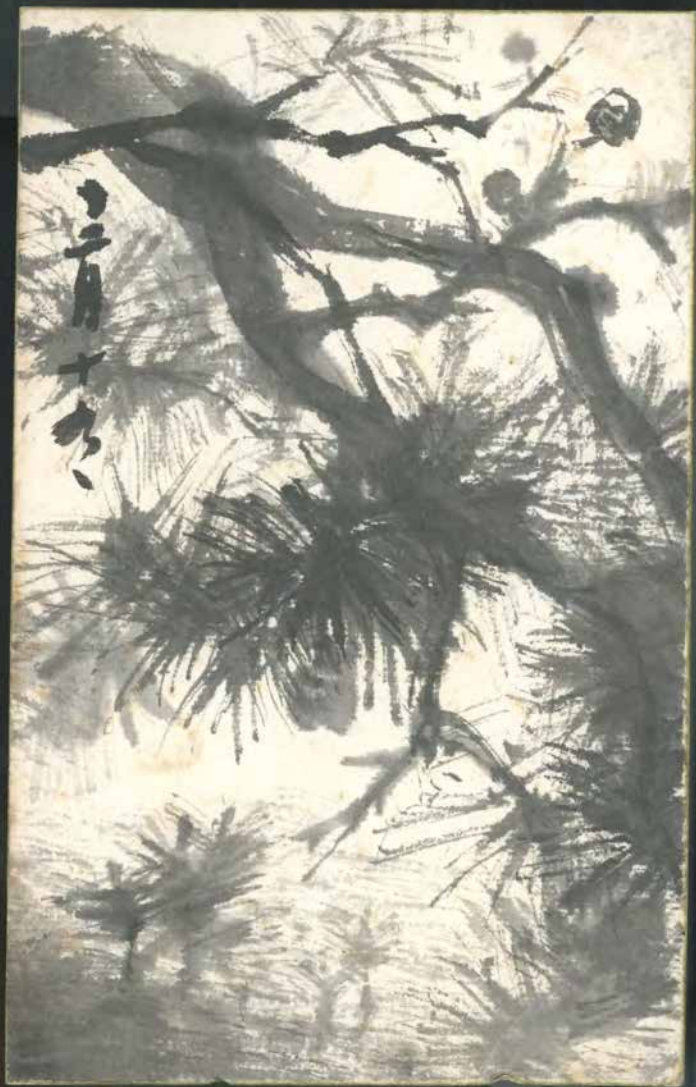


きかは便郵

高野市油
芥子油

高野市
油

高野市油
色彩
すつた
やまの気村
落付て
ホツ
のど
のものを
のと思つ
がど
が
が大



きかは便郵



高部市油ヶ池
少女隊 申

ニありぬまきり
先生

色々の書き送るに
はあしきなり

山の中ははるの
あしきなはで一村
かたしきつらみ
みつ子がきり

眼の方付もきり
もあしきかたまつた

かたしきなはで一村
あしきなり 一度反作江
家も御いさなは

都長きり

大川に生る

ちゅう中 其方

やしの送しとて山の

びまのしこの目にやる

すまのまのふの百様にいはせ

ひも一のうらまひすがいくら

中ヤ芳のあひや

ひまのあひや 不度 さつ



大川に生る

郵便はかき



高野市下上原色
津山鉄山跡角

高野市下上原色
津山鉄山跡角

うつろり家しくまり
いたを 空をかりを
のせを 性をまうを
山を 海をまを 人 辰
四のり 便りを 少し
雪やうしと思ひます
岡市 左が 曲方ひす
ハ 延り 玉水より 才る 道
西の 山上の ら 才る 道 が
モ一ツ あり ます 法立
の 先を 付つり ころ 中 江
新の 郵便の 便りを
付つり 山 上りの 道に
付つり 山 上りの 道に
一月五日 田舎人 見る ぬ
人の 姿を 見ん
村の 安に 晴しい 日です



永梅林

畫房
北面



郵便はか

京都市油小路
北小路角

齋藤圭介

先生

当分 翠平山小屋と五小
屋とを中心にして居りわ
りをすつかり 作覧に本
てしまふと思ひます
で画意は二義として出ま
るだけ如実に写して作
覧に供したいと思ひます
然しこんないぢりたものに
なりまゝ
此は先信の半径の正
線です 翠平屋の向ふ
の家です 翠平山小屋は
この家の手前 右へ昇つた
處にあります 因中ニ尾
の猫は此處にまゐりたる猫
です 山のもの 殊に生物は
非常に奇麗です



壺屋より南里の庭



郵便はかき

京都府下京区
油小路
北小路

齋藤圭介

先生

大に計るは
 山に大に
 見入る可
 一
 昔

といつて
 せんめつ
 成長し
 たり
 た



妙に
 無年
 毎
 山
 入
 言
 天
 つ
 て
 松
 葉
 を
 か
 り

果
 の
 て
 ま
 ち
 あり

紺
 の
 パ
 ッ
 子
 を
 買
 へ

故
 衣
 香

え
 之
 氣
 豆
 都
 へ
 は
 師
 じ
 ぬ
 と
 ソ
 っ
 て
 ま
 ち
 あり

NO.11~20



郵便便

白川都市下高区油小路
北小路角

高橋五郎先生



开

翠山小屋西序
遠近之圖

丁巳
月
日

郵便はか



魚市

油少紙北巾紙角

高し友直介

芝生

一歩或は石の頬白たるの祟果と見
 射りた地上ニミ尺の小松の枝
 春日なが祟果立ちとする迄の
 祟果下すから夏日蛇の祟果を
 考へてよらいものと見へます
 然し此をの祟果のジヤンバルバン
 百名をの空口はどうあんで
 しようか 小室の世界で
 ありまうが野心死ではあり
 ませんか
 永くらの山に頼白たるに祟
 雀に雀のひなが 望るこみ
 あるそとです
 それ等と生佐と隣りする事
 が出来る孝へたなりでも清
 々するではありませんか

壺物
モツと板が飯
つて見難くな
つまつまの
外側は松の枝
や内側
は細かくわ
らかい糸の
よしな草を
集めてあり
ます



郵便はかき



京都市下より
小阪北十路
自

志
ハ
林
三
分

先生

少くも重儀をまゐりおしした
人ぎよいの病が苦しじて四五
軒の人々が非常市に
いささかたつてさまじ
いお世にすまじ
おとしたかうたので
ゆげを家からしよ
いふさか困つたもの
とのんりす 無人の
深山で穴居しすか
弟に里へ下りて一切門戸を
鎖しよすか 旅野へ行
き出すか 秋をふくと
おはるやしす



五
方南
山
を
見
る
二
月
十
日

きかは便郵



京都府下京区
油小路北十丁目

高橋在介

先生

人々の歌程の
 蛸の巢木が
 松の木のぶら
 下つていま
 した
 土地の人は
 中蛸の
 巢木を
 とひひ
 ます
 つまり
 クマン蜂
 と名付
 の蛸の
 中の蛸
 の名を
 さん



二月十三日
 中蛸の巢

じいちゃんか
 出まはつて
 のめくニ
 したつていま
 あり、お
 松の皮と少し
 の煮りた
 蟻で造ら
 います、宣
 のものす

郵便はかき



京都市下京包
油小路茶屋角

高橋重介
先生

本田先生の例の金三屏
凡令終了いたし
金屏一雙十金位
十ヶ月賦で厚き毛
五人位描かして小ると
生徒のあり当方充分
勉強致すこと思ひ
勝手な事なご思ひ
少席の節りゆ注し
夏より春日日大伴化す
たふしんはたまにせ
あいな事なれ 早
ニ丑位が、トテク
宣ひゆるり製
なると思ひ

小室より一里
下近一里出立
寺田より一里
とあるなり

朽つてものなりは
朽たぬ者なりが
神に近いと申し小
此息味におて
神に最も近い十五
勉強のつとめには聊か
悩ます小

二月廿九日

東風利かきし
一輪虎咲き増し
東山

三月下旬 頂里に下り
出立のつとめ
製作をつとめ
とあるなり



郵便はかき



京都市下京区
油小路北口角

高橋連介

先生

全庭植花
満開香気馥郁

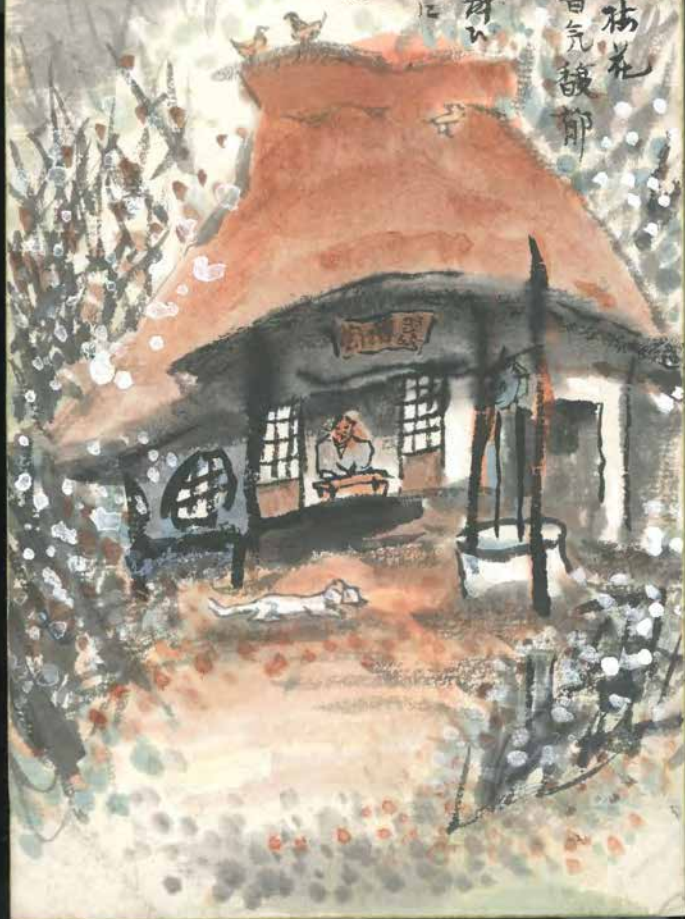
嬉少者

登上り舞い

翠山内に

酔子の
憂

三月
三日





きかは便郵



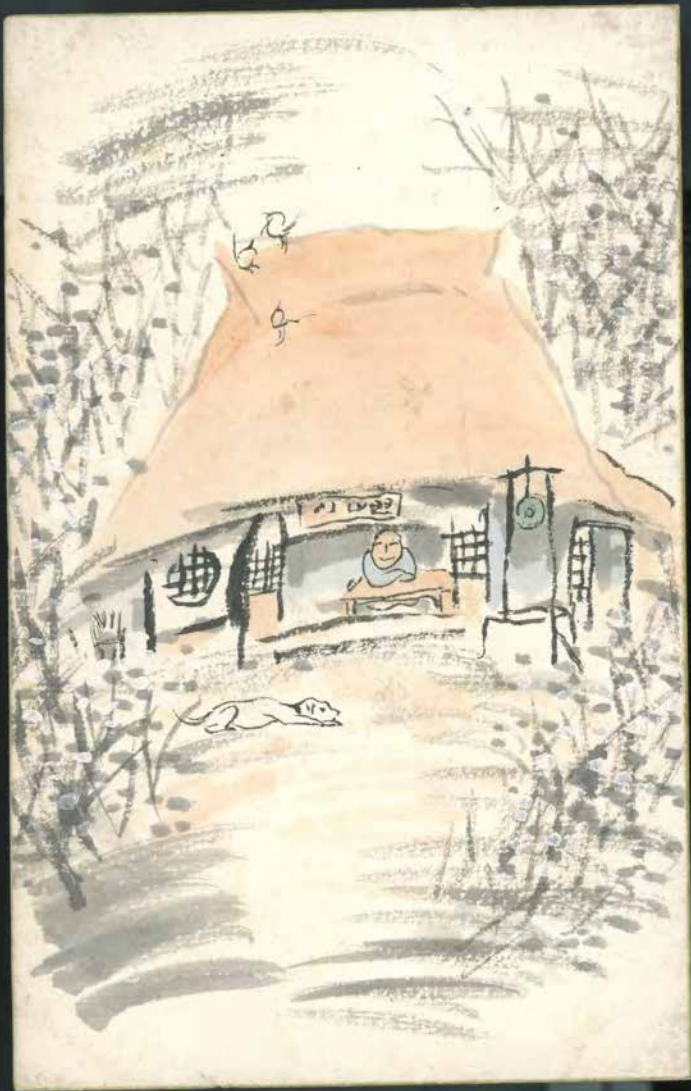
京都下町
油ヶ池丸や

九条五丁目

文子

昨日は候翠山梅
嶺之園夕景即
興に乗って楠系木
したもののわいさ清代
さふこつが彼を極上
るものと思ひなす
こころに成るるなり
行はしやす

三月四日



きかは便郵



京都市下安色
油小路心少次郎

高橋本介

先生

少年紙再交の存三配
並謝しとす 五日お
りよりたたら 里に下り
今一年閑居を研定元
と續けし事一に
亦成事甚たれ 少序
中流を以て 度教力
四月上旬より 里に下り
心算亦 丁度菜の
養も以て 頃思ひ
原一度おのり引
里に出入せめて 月度
位は 丁度 仰ぎ度毛
のり

三月
十日朝

今朝もきこへ

朝昔あり

子思



郵便はかき



京都市下京区
油小路北口角

齋藤圭久

先生

此後何時に末明に
送りますか
下の金着板を
下したはびき

妙子半信子オマカリ
山道にたりし事始
くばかり
お節さんはおまのた
とて飯事す
山之口からんや春山
の花に
翌朝前庭の末山
にナルか
の山が
即ち
と株
非めて
松上
上化



尋山早潮採蘭

之圖

きかは便郵



真都市下直る
油小路北詰角

齋藤圭介
先生

雲雀 高くあがる

生のふくらみ



三月廿九日

懶
羽
山

NO.21~30

郵便はかき



京都市下白丁
油小路北小路角

高橋圭介
先生

今日ハ四月の雛、節句
出では春の祭リです
田舎らしい馬馳まを
持つて子供が山へ集
つてきます

午後うら生憎の雨
包を擔ぎ山の子等
が山の腹をまわつて
帰ります

昨日今日摘草つるの
垣外にくる



四月三日
瀬尾山





郵便便

京都市下京区
油小路北側一角

新井圭介

先生

山に咲くもの皆梅と云ふと思つてしま

したが半以上巴旦杏のやま木

樹のゆゑに花は白梅に似て、
ちよとす 花柄のし長く

梅のゆゑに

来り十日には

山を下り心積

りに水俣備

つたてり

里は人ノ菜

の茶と蝶と雲雀

のせりりにも片付ヨル

へは一度出京石面

より度よりと云ル

花が重なり

咲つてつまず

面白く 庭木さきに絶々のものと

木根非常に

新ハル

四月五日



郵便はかき



京都府下
市
下
町
南
角
田
中
氏
子
氏
子
氏
子

古河 町 一 筋

一 丁

後 部

並 日 賢 寺 村 字 多 々 姓

翠 山



郵便はかき

魚都市下直道
油中路小川路角

高杉圭介

先生

あつち羅房座を
より見たりあし
このる中川と大阪に
通ずる街道か
ります
今日ヤマト片附ひま
した急所屏風にか
かつて見たいと思ひ
原一度杉杉を
さうが
の一月月賦金を
井田五郎の
へま
手紙を
郵便を
ましが



大田先生に
内諾を下し
てか小川を小成
す(る)

四月十五日

王子山

郵便はかき



京都市下京区
油小路北詰角

高橋圭介

先生

自公勝手の手紙が京都府
目りて北を失す。怖れ
ゆへかと思ひ生じたが
今日才一回目の自公金
費し生じた。才4集金
郵便法にあより生じた
よくないもつてすが、今
合凡この手紙を有り、
一番簡明の方法と思
ひますので利用した次第
で、意よりと云へて、
上小太田先生の方へも
同文同様の次第で、
また、成り、
へま、
ま、
ま、



白
三十五
瀬
平
山

郵便はかき

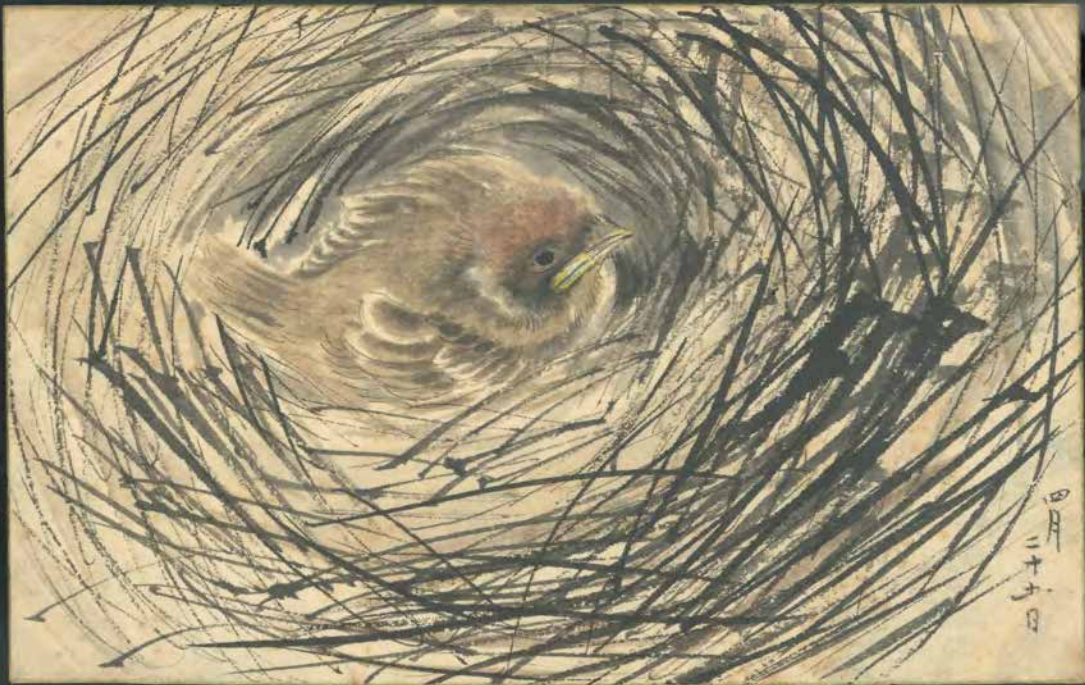


京都市下京区
油小路七丁目

六角

圭介先生

川漢り野漢りに花月半にたよ
つてお世信をいふりよした
△天雀つ子まきこも 押ふ産九
八何にち月ころ秋りてす
家の中も大部より片行けり
したるで月内よ赤柿個片
風も運搬の程なしてたが
草花でやりたつてもか少し
残つてつてすのです本月の
上旬柿は橋岡等つのも
け意向は伺いたつて思ひ
ますの孝へ置いとるなり



四月二十四日

きかは便郵



京都府下京町

神田区北小町

お礼

三介 先生

五月十日

懶野山

極楽寺の御願で二回召
極楽寺の御願で二回召

の御願で二回召
の御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

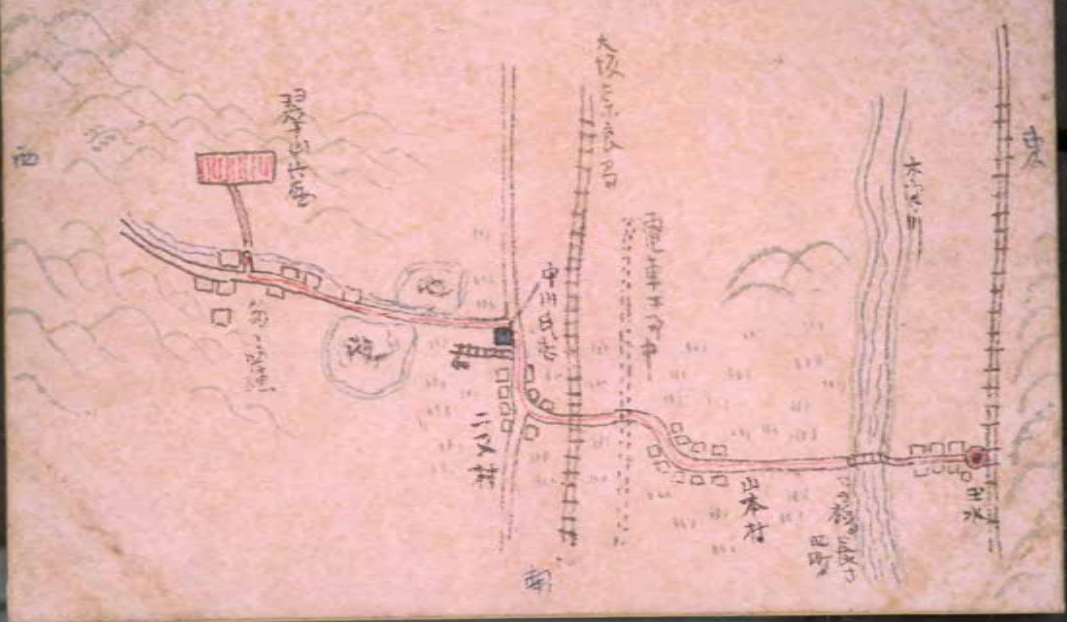
御願で二回召
御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

御願で二回召
御願で二回召

北



郵便はかき



京都 市下白丁
油小路水町
高橋三介
先生

野山草の花を失ひ
新録の多かりしは
たゞ伊りのヨルキン
ポーケの黄毛の花が
全巻をとりしこと
中旬迄に見えぬ
折向のひんもの
んでしやたかひ
おるに故陸軍
腰でぬるや
近いうちに
のるる市
たんぼの
進歩消地の上
まじり一
かりぬ

五月十九日
風おまじに吹散り上る
氣解りてせん

五月十九日

藤野山

郵便はかき



京都市下京区
油小路北小路角

高橋圭介

先生

山崎のちかたが身山に属
の花園には果木樹が
六七種敷ありとす今
ホーランドと夏島柑が
花成るを都五月の晴
つた葉赤に純白の花
さつりてのすす
いかにも暖国らしいまうい
香と在一帯ににまわ
してはすす小生の好むは
梅もさかんな傳動と
してはすす梅木の志
中すらん梅すす
柳こころいよまのま極く
合身弱くからかしに花
を結ていすす



夏蜜柑花 五月廿九日

乃之四維房

懷素出

きかは便郵



京都市下京区油小路
北小路角

齊岡之藤五介

先生

懐野山毎の釣

はげすめて釣ルヨリます

一尺に

足りな

いし

瀬で



一寸位のはすといふ川奥が

釣ルまあり今夕は魚のまの太ちり

ものを釣リタ夕月の影を踏んで

かるり、は月見ユキキがづらりと

咲いていすあり、燈もかたり也わーすた



六月

五日



NO.31~40

郵便はかき



京都下町
仲太夫
成永
先生

敬啓

亦からけとと 一箇信を 効能

有が

此の心は 空に上りて

空の心は 空の心

地の心は 大地の心

人の心は 人の心

愉快に 悦びて

心は 心



きかは便郵

東京市下京区
油小路少路角
高橋直介
先生

二月十日

田租が初入り前う田かるとい
賑わふ京色となりました

ほととぎす

鳴りまわす





郵便はかき

京都府下京区

油小路北小路角

高井連介

先生

平調子の大梅

少しくたりやうた

所はうつとろしい

事と思ひます

思の面は益詮難

い風趣となりませ

した 虫は少なく

なりませたが蛙とほととぎすは

益しなく音を高めませ

夜雨戸を寝りますと水田に

白雨かしくと降りるいび

いませ

果園のなすやまうりは甚この

さうけてよみがへりませたが

草花はあつかりな長かうあ

なりませた 長らく雨をまうてくは

朝の朝あさがほもだめになりませた

五月廿一日





郵便はかき

京都市下京区
油小路
藤圭介
先生

由手紙 行交
本田先生 件
少 乾流 河
眼が一寸あやし
物 巾着 手紙
すかた 分 司 信
あり 先生 一ツ
と 母 さん 一ツ
け たる 公 成 成
した
おの 田 一ツ
化 した
夕 夕
年

こゝから一程に立つた所は
笑にいと思ひやあり
人子若の一切はらぬ水
寺が

行々子

山はとーかす

ほたろてんぶ

あふの情は

久な事ていふか

六月廿七

(5)



郵便はか

京都市下京区

油小路北口

所上藤生

之生

梅雨降り續りしありが来りたヤリ
 出た水湯流早くは釣リ方では
 駄目にナリナリ九のび三四寸糸多たらし
 夕方カクとラチチアルルツヤナリとセヤ
 ナすと翌朝ハスに似た 地方いほ
 モツとツム

セハ寸の
 かかりてつま
 す

昔の釣子リ
 の釣はうま
 とつちで

釣の釣目
 ので昨日か
 初れたしすが

釣はまたヤル
 まさ犬も針
 と印ルこま

したからそれ
 は釣のしわが
 思ひます

五丁の内ニヤ
 かりヨリ犬から
 コルは釣ルヤ
 河筋と思へ小ます



早朝
 上カに行
 く釣は
 又別報
 の糸し
 かりま
 す

四五丁
 もつけ
 ら面白
 からくと
 思ひ

今
 釣糸を急
 造して来
 ます

七月二日

郵便はかき



東京市下町
申中街北中橋

高橋圭介

先生

なかに江戸釣も、漢になり
申した。昨朝二百目位の鰻
を一尾上げました。モウモカ
いらたうなりました。土地には
ドク口とつぶ、外ボハゼの一種
この奥をけはかりました。
ニルも、最初の上にはゆきま
せ釣道にむすびますと、大川
は七月より山の巾は七月に
入つては針にはこたうたうと
しひす。只、多岐が釣れるの
にはおにします。
永びおまの釣も、終りを生に
かます。ニルからは自身を、大川
で勉強が、あまると思ひ
ます。



六月
八日
下
カ
ロ



郵便便

真都市下宿
油小路北小路角

齋藤

美介先生

連日三十二度を下らざるの暑日
所々暑く申候なり。と云すやけ
主なる所なり。と云すやけ
当方の直射の中はまじしいです
を内日暑さしと云すやけ
田舎の情景人物に面白い
不意が得る。と云すやけ
り所り。と云すやけ
日々暮合田川に炊き。夫は風
雨へはいる。近の汗を流して
小泉は至るところ見ら小泉す
ちんとのどかふ。と云すやけ
すんか。尤も表現が拙です
から。と云すやけ。尤ものが現る。と云すやけ
すんか。



七月十三日
三猿屋
山



郵便便か

京都市下直正

油小路北小路

角

高杉建介

先生

此書は送りの薬品に今

柳文ありは社中

目し。柳大分ありが

見りた

河原上出たあや

登る上りあや

ま有り礼

上



六月二十一日朝
鹿一偶



郵便便

白下市

下谷区神田路六丁目

高橋善平

之

七月廿一日西丸相

日着中一尺也西丸上
東京の所敵昨日漸く退散す日
から司曲うかた知ら相成水





郵便はか

京都市下京区
油小路北小路角
高橋主三
先生

一昨日より山村の所を
と迎へて

橋の袂に砂を敷き
線香を立ててあり

あふゆへ火をうきと思
ひますか

思ひますか
申す面白

坊やえが村の子供も
に在りて家々を廻

いまあり 永らも
カルカラーがよく現

中川といはれ
もの

もの



八月十五日

NO.41~50

郵便便



高都 市下高邑
沖中 路火十町角

高田 兼吉 先生

朝夕ハ急に秋らしくなりえた

八月廿四日

百千音が高音を張り出し来た

コロギも中調子を出し出した

赤トンボ 野萩 只て秋の情

曇となりました

気分は何とあり

澄さぬさよふ

すが 漂浪の

負画師

には 赤は一番

游の冊の

空気もよほど澄んで見えた

赤くは 魚と 岸風に

か、水と 思ひます



郵便はかき



京都市下京区
油小路北十丁目

高橋正幸

先生

角

ちよりー 他出つたー 大
はまなまら道二方依
張つちー こまらこまら
ちよして左らー くら
天失能ららら
ふらららららららら



八月廿八日
静翠山



郵便はかき

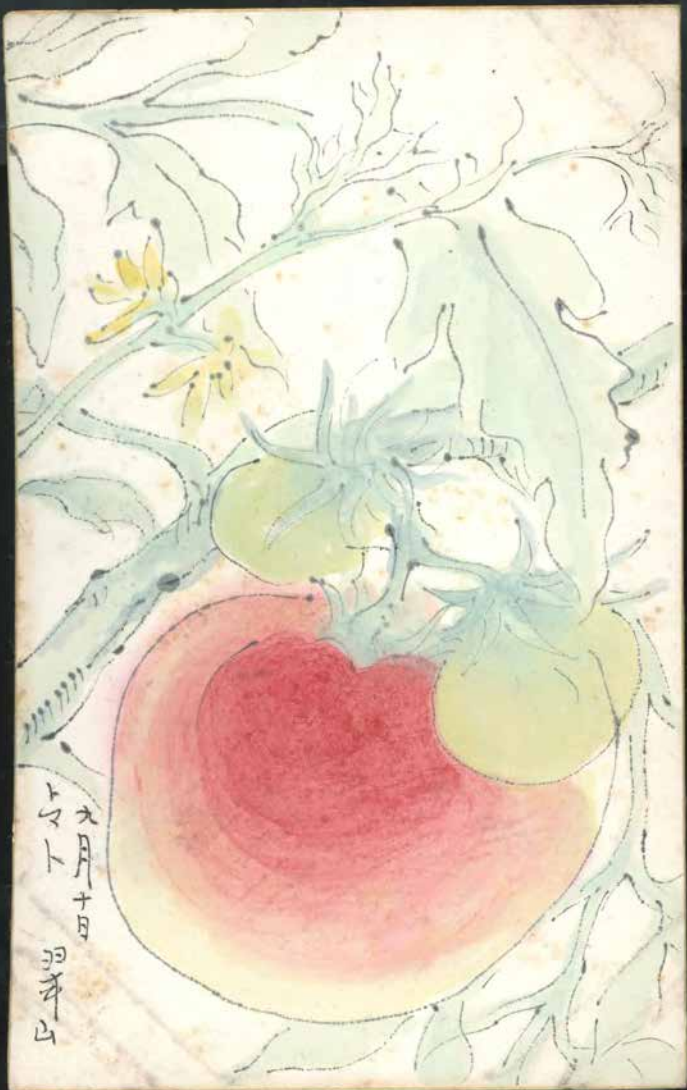


東京市下
油小路
油小路

高橋圭介

先生

日園の佳味を以て
評判のよかつたトマトと
秋風とせに潤いの
旨味を合ひし
澄んで五月空に赤蜻蛉が
羽ひおしました
箱も大きく取りました
背戸の山に朝、五時の雀が
後つてまゝ
去年、米九時のよ、ふ
情景に丸くはめて来た



トマト
九月十日

羽幸山

郵便はかき



京都市下京区
油小路北中町角

六向孫主付

先生

夏は生れた頬白が
丘の上畑の畦に夕、
夕、と啼きまよす
野菊がはつきり
秋を思はせませす
柿の実が色づき、
初めやうた
夕空の青くすんだ
さびしさ この秋は
馬鹿にさびしい
人と語るは尚更
わびしい
合てこの秋は馬鹿に
さびしい



九月十七日

若頬白鳥

若原

郵便はかき



京都市下京区
油小路北小路角

高橋孫五郎

先生

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに



大月二十日 日暮山

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに

思ひぬに



郵便はがき



高橋直介

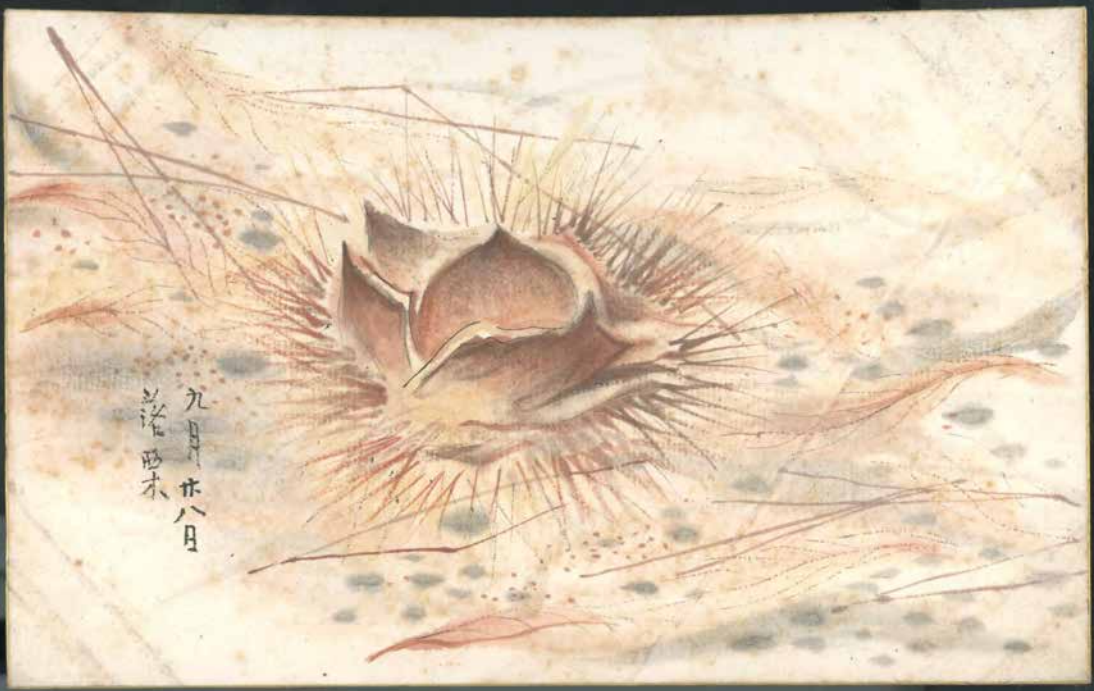
先生

京都府下邑
沖津路某氏宛

灼熱之餘、暑月俄に冷却
一朝にして肌寒を覺へ小
所障りも所産あり、又
亦では俄に多忙過ぎ
中因りの事と存せし
今度は時候も安定
したよりすに由り
本月十日頃まで俄に
屏風を頂戴にせしり小
多刀由生、乗上の心算花に
小わが、弟と一、句、動
車だけき、弟らせりか
子許小、不忠なり

高橋直介

九月廿八日
兰渚西木



郵便はかき



京都府下京邑
油小路北小路角
高橋圭介
先生

大
気澄み渡り

あ山の眺めはつきり

して東より

時に犬吠の馳り及豆の玉

はつきりしよ

早稲日既に充分に実り

赤く穂さ垂れつゝ

つばめ常に高く飛んで

いま

今日午後一時木枯

に似た空の風が吹き

まゝた先し直ぐ

お湯かくなりました

夏あまり見なかつた虹

が不思議にも秋の比

次に時々物ま



十月五日



郵便便か
13 OCT 1911

高橋 達行
先生

東京市本町二丁目
油小路北詰角

十月十日 懶翠牛山

懶翠牛山は懶翠牛山であらう出ず

にありたり 茲四十五日は

絶好の梅も期所ぞ

すがとくも出

不性で因りよ

あり 頼人を田力



もニエ^可あぢやふいと都合が悪いとの事ぞ

又少し何とかが魚まゝが何事かあー！とぞ

巾着^可少しあつたおす

お懐^可あつたおす

巾着^可あつたおす

雲雀^可ま春とまたお

さへおり也しよ

した

もくせいしまりに

芳香を送りおす





郵便はかき

京都市下高尾
沖中河七少河舟

高尾主人

之志

報障ばかり出来
出京一日血か
まつて少しいら
しつます
気候が絶好です
今月内にはい
も秋蔵にりり
いと男へこつ
収園のから
あししました
山にちらく
栗を雑へて
有



十月十日



郵便はかき



京都市下京

区油小路北詰

有

高橋正一

之出

笑予の屏風箱小し繩

水の跡が虫足たのし

中身は昔の政障ふくりり

片安まをる

動橋ちまりはゆしく十生

心身は板か砂日は一日模はり

物し本日廿二平常こゆ

これまゆめさ意

山野全く秋にきり小

庭の山茶花しほりし

咲小

瀬翠山



十月廿一日

NO.51~60

郵便はかき



京都市油小路
北小路角

高橋圭介

先生

去る四日の夜から大典八中
自出度の餘波でございふ
事か初めらんまりぬ
次回深山香箱はナセりの
夜がソーソい
柏子木と太鼓に様ネリ
あぶなつを今日の下は
かりとるにしていふあふど
大した夜警言であ
時に田塚の賛詞など
又うれしいものありま
オ



十一月廿四日

瀨野亭

夜夢圖



郵便は

白河市
下町
油小路
北小路角

高橋圭介

先生

昔ながらの山野を忍せり
我膽の花 昔取中に
いとまつ、ま、刀かに
笑つてのまあ

しはらく、びの中、忘れこいた
電車の走る音が
田舎の空気がとこ六七町
劇はあれた山 服へはく
すえます

夕方山裾の草上に次ら
ばいながら、こころいふ、
の草花をき見こい、
をびえて、い、
あ、れ、元、の、ま、
あります



十一月
山

郵便はき



京都市下京区
油小路北小路角

齋藤重介

先生

買ふ年か餘程をつかしの
とつふ紀人志画がき
川刺交多計
一度見物したことも思ひ
のすか恐ろしいよ
気もしまふ
然し冬残り光景も
且之非見物したつと思
つていま
遠雷の如き礼砲にて
はるか京都の暮を祝
ふ縁想心してやあり



田舎の
奉祝賑ひ

十月
十四日

郵便はかき



京都市下京区
油小路北小路角

藤圭介
先生

先生所存の山柿鶴の子の
つよし干し市国を思ひ出しませんか
赤味より小し黒んた位の生乾
は町の精養小左上菓菓子
以上美味しい味のあるものには
一寸敬鳴きます
自然に下自然の恵みがあるも
つです
産房の南縁につまして置き
ますと黒くなるのを待つるも
なく 一房位直ぐなります
ころふ喰べ方は殊に美味しい
のだからと思ひます



十二月一日
春祝の飾りにあらず



郵便はかき

白の都市下意已
油小路北山

高橋

幸心先生

この頃になり田舎も奉迎
踊り合ふなよみ初り
夜半一家あま野中を
提灯の灯がちらほら
トユトユくと太鼓の音
が流し返ります
山の腹 立木にかくれ
自今村々へ帰ります
気のまゝあかしのまが
私に狐火を見よ
念持で空から
ながめておまへ



月
月

郵便はき



京都府下京区
油小路北町

高橋圭介

先生

中より過はくま詠しよす 終電に逢ふ 周崎に送る
 曉の枕頭に獅子の咆哮あり アフリカの野にありて
 けり 蓋まで
 驚き
 めざめり



昨夜ねづきのめく光に
 しをすに 城 山景に
 仰り来りた
 け内を輝きまじ
 ありけり
 甲おこしす

十
 十二日

折山

郵便はき



京都市小倉町
沖中門北小路角

高橋

三介先生

今朝の冬かやつて

暑かりた

今朝初め

手洗ひに薄氷を

見せりた

田甫も

あけりかけあふく

淋しい情景と

ありました



十二月十七日



郵便便

高橋孫吉
先生

京都市下京区
油小路北七路角

大曾ふ承り送
意に預り一々様
交
毎度あからし礼の
申上りもアリま
せし 身にもあ省
しまお
田舎ではもつたいた
い柄のりか早速正
月の晴着とし而平
志を込め申すと
又やよ大好物の納豆
御山永又おの
中礼申上ります

何の事で賞へて来ますか
 をやの登止後と踊を上手にやります
 嬉しい時は一人でさつとやります

ヨカゲ

ドロー

リローハ

ヨイト

コリマ

サツ

何の事

だかさつぱり

解りません

正月には長い袖の着物を
 を着て踊るのだといつて



馬鹿に気遣
 嫌
 の態で

十二月

赤五日

翠平山

郵便はかき



京都市下京区

油小路北小路角

高橋三介

先生

東京ではあまり見ませんが

今月城南高等トンド日でした

三時頃からパルクといふ五月

が方々からうへてまゝです

子供のまゝは五月や笑聲

四時頃トウ村から起す

ました

爆竹のあかり方で一年の福

の因由を判じるのたゞまであ

この火を竹の先に移しては家

の十五日の煮まのまじ一切

の因由を判じる福の事を

やりませう 先生にはそん

ふあうも 全作うご一程

田舎の正月らしい気分がそれ

が面白く見ふ小まうた



二月十五日
爆竹火

京都一市下上京区
油小路北カ段ノ角

郵便は

六郎孫主介

先生



頃日來の安きまでおつかり

まのつてしまひました 孟信

も怠り勝手な所見も怠り勝手

ち何れか申譯すのたより事

ばかり 暹日太田先生から

好物種々頂戴甚だ念猶

していまおきあす計ありは

宜き言ははれ申し

惟勤者しく一度出来し方の

すか神徳を布でまつていま

この方生念には多條多く安心

できが動けなく自由で弱つて

います

年禄の災のぬきゆ産寸尺に狭つ

てつよすのひか自の手洗 椽の

端まで さとが此ます

一月末禁煙の準備をなす煙を

めまいを一日刻十分

つらい事であ



東禄北窓

二景一日

NO.61~70



郵便はかき

京都市油小路
北下路一角

下りる

高橋主人

先生

非常な無休休しました
序障りもありよせんか
成日月がこいれこの神徑有
と併發永りる悩みの分不
出外先にはさる事が出永
よせんでしたか
春風一時に到りすつかり
お懸りました もう大丈夫で
今日休 東山へ畑へ出て見ま
した がんが 草 ぞろく
花の仕度としてまナリ
土着が出るとも もう間か
いでしょ

二月廿三日
漱山



郵便はかき



存
イホケン
祭



高尾
美
可
柳

市
内
沖
小
路
此
上
路
角

一不似右より中六未だ死せず



河豚鍋の下戸も一盞の怪笑見
春の雪と血にもうさや鱧鮓

河豚汁と春はあせふの坂はかき
鮭汁の膚をあらうや丁太の雪

及ゆりぬ

世より生

郵便はかき



京都市下京区
油小路北詰角

六角田原正五郎

先生

昨春の様に桜並木南庭に
丘々と若草の色を持ち
ました春風は香気
を送るも 雨もなからず
と思ひます
春日やありましたか
春らしい暖かさ
牛車の輪のまじり
こりくと助かると
かれます



三月
廿九日

郵便はき



高橋 圭介先生

高橋 市油 叩

下のり

よほど

春めきあつたが、成る二日
 はまだ大分流りありてあ
 ち急降りもありて、人か
 衣内と小供は、未だあつ
 かりしよし、か、か、あつ
 ち急降りて、ええ、ええ、かへ
 し、あつた
 昨日一千と、あつた、健立と
 上、天王の社へ、行つて
 貝、あつた、健立、あつた、
 よつ、あつた、あつた
 穀、あつた、あつた、あつた
 の、あつた、あつた、あつた
 ひ、あつた、あつた、あつた



郵便便か



京都市下京区

油小路北七路し角

高橋圭介先生

三月二十一日

梅の三分通り

紅梅の今更満つ井で

ありませぬ

三月廿日

一輪三輪

三十五六日頃

見頃をそそびす



ふからば一気には百花

咲き香ふでしよこり

外月白々には

山つゝじ

結んで純白の木子が

出るに聊自遣に

山は梅よりま

こいを待つて

いませぬ

郵便はかき



六ふ林

圭介先生

高橋市
油十郎北五郎

一々ルルを何にけした
よし赤糸林を河より
申わけありませむ
毎々生気を失ふのむす
かふしりの或は日月のヒ
ツツコイにはおはしまし
頭腦がボヤケテ或は又
性があやまり 楽から
はしからず 空を漠と
かきや性になりし
山も野も今こそ暮は
甜月を人も日ぬれ感
激のあひが

四月廿九日

笑日の白き花は遠くはかきとるに
中田の並木林の夕ウチか
とれとるすれは
のにはあつたと思ひます
今一ツ位一が

花井物元氏の
思ひあして
あつたか
しやうか





郵便はか

高橋五介

先生

直七市油小路
北七路角

この頃、何れか、
か、
白、
田、
が、
茶、
城、
り、
に、
小、
一、
此、

三月廿一日 四時 巳





郵便はかき

高の坂

介先生

京都市油
小路北の角

黄ちい月の日外る待暮
 河をよのそそ(園)うくり五人十人の都が
 一勢に帰り路をかかりませす
 (但し半月寺の(元)見)
 紺餅に赤たすき、白午棧
 新緑の蔭月を背景として
 馬鹿に調子のいいものあり
 月見音子が思ひ出したよりに
 ボウくと咲きます 桐の花が
 高く強烈な芳香を送つてませす
 河をよかび都がながめりませす
 永い魚躁うら振り出て箱落ち
 つまもとり産しませす



五月二十九日

きかは便郵



高都市
油小路
角

高橋 圭介

とと

葦園の葦が取り柿味
てふよりうは二番が初
あるのたそしむあり
桐の花も野つゆら
しよつにありやうた
見見子のこゝと日
初に咲つていひあり
苗代の苗も四五寸に
びやうた
夕方うらなさがしよつに
花の交ひあり

六月
十日



郵便はかき



京都市
北小路
油小路

高橋圭介

先生

麦刈ナルを得つ
ぬい色つき、
かたふいていませ
赤おのの花か
畑一面に紅白
の小粒をつけて
いまあ 雲雀
なままあ



二月
十日

NO.71~80

郵便はかき

高松市油小路
北小路角

高松圭介

先生



ニ三日のうてと、いつせいに
田植が初まりました
つすは湖のめぐり、拙
居方は、はなはだの、秋が
ありやます

殊々、密に、び

蛙しきりに、あつた、

まあ

六月廿二日



きかは便郵



向一都市
油路

言からぬ

主介之先

梅るふを暑さ頼にかへ
り左田植時に雨のな
のは田不家も空や困る
中てしよりが見るゆ
情景が薄いようです
一雨欲しいものであ

街道がキラキラ光り
真夏の夕暮がしまあ
日暮倉うらは由農村の
はをだやかな瓦合れを
が身まあり強怒ふ人
な人もいかに平和に
に見えへまあり
やかてへちまやひよ
さら下さのもろ直で



きかは便郵



東京市油小路

北山鯉角

高橋甚五郎

先生

貴札を鴨子四日までに
受取いたしました

ゆ菓子をせがむもの
ですかゝり流石の様

白娘もかしへこたれて
います

いよいよ

どういふ風に教之月

すさのか見当が

つよござん



七月十日

每三四鐘方

郵便はか



直都市油
角

ありぬ

まきり
えん

あし城ヶ家と
いふ金魚地一帯に
殆んど枯てらるゝ
とよしふ田且杓
畑があまりあり
ここの花は可成見
ずおもひごしたか
實も中は枯て難
い趣あり
早朝散赤、四ウ五
ウつまみ喰ふには
もつてこいであ



巴早香

七月

十九日

きかは便郵



京都市由
米野
野原
野原

こころは、割金い涼しい
ふじあが、向の暑さは
赦人的のもの、と、やま、ま
した、同、称、障りも
申座、と、思、ひ、す、か
た、ふ、い、へ、行、て、見、ま、り、た
下、この、座、の、子、供、が
今、大、表、面、白、い、と、思、ひ
ま、し、た
我、と、言、う、ら、も、中、々、暑、さ
い、ふ、あ、い、あ



きかは便郵



京都市油小路

北小段角

高藤重介

先生

子所の鳥は

眼の緑が

白くない

といふ中

を知ら

まうら



八月十三日

薄草白

後山散家の頭上に

小さいものが三四に長いま

す。二三に長はあからま

くありまうらふが

一に長かけおらこ歸り

おらぬ目白の雛であ

うま
餌たつりば

よいと思ひまうら

きかは便郵

京都市神楽坂栄路
角

高橋直介
先生



〇

清涼の気がまぶさるる
心静まるる
有毎子馬追が收帳の事ありを治ん
くん

八月二十九日



郵便はかき



京都市油小路

北小路角

藤生

先生

朝の耕は怠り

がちでありか夕の

釣は飲かあ

はまらである

今年は日照り

小川に流小た

魚影 殆どあり

芝 駈ル左川

沿ひを歩くと気

を小が心を美良

く水もあす、中

花の世の中



九月
六日

虫の音
楽
し
ヨ
リ
で
あ
ら
ま
り
て
い
る
十
生
も
思
ひ
が
あ
ら
ま
る
し
ば
で
あ
ら
ま
る

給事
乳上



一の某國に息慢のお
迎所が収穫の満ち
町介子ボツクく出来
ます
我をさるぶといふ意大
念に其をりしてゐる
やぢやありませんか
う先生の目先生と同
く觀する事が出来るは
心慢の得でしよう？
夜月澄み渡り
その鳴音又しきり
秋庭ながら獨り秋意
を写くる夜を更ふ
しました

藥劑師

京都小川通御池南
齋藤仙也藥室
電話二四二番
口座三七一九番

明治

年 月 日

NO.

外用法

劑

殿

藥劑師 齋藤仙也 印

京都市住小路
北小路南

高橋圭介

先生

小生の菜園は怠慢のお
隣近所が収穫の満ち
た時今もボツク〜出来ぬ
束ます
自然をみるぶといふ意大志
信念念に其基りしてゐる
譯がやありませんが
全く先生の自然生と同
しく観る事が出来るは
怠慢又の得でしよりの？
昨夜月澄み深り
虫の鳴き音又しきり
我度ながら 獨り秋意
を写し予夜を更ふ
しました





九月十五日

きかは便郵

京都市油小路
路北十路角

高橋圭介

先生



迹子の袖々袂引つ懸かつたり
 婦め子の影交や向ふ可ねをひかけたり
 茸狩には禁物である内藤さつ
 猿取せ次 東京では大福餅を
 包む甘党は所知の甘味つは
 ばつかついはらう ともいふよりです
 秋も末か木枯しの冬ともなうとん
 真紅といつても 云ひきれぬ程
 紅くなる空の色
 その上を粧ふ如く胡粉をつけ
 あるいはいには佳いでしよすが
 先生は今のこの色の調子が非
 常に奇きであります



十月二日

翠山

NO.81~90



きかは便郵



東京市
油小路北小路

高橋圭介

先生

五月五日

東京市

十月五日

泉山の栗拾ひ集め山の趣を
以て見せ
する

意
味
ど

ほんの
小々

中送りの
拾ひ集め

と申しま
おと

きたないも
ののぶしにも

歳がらんますが

後山栗の美味

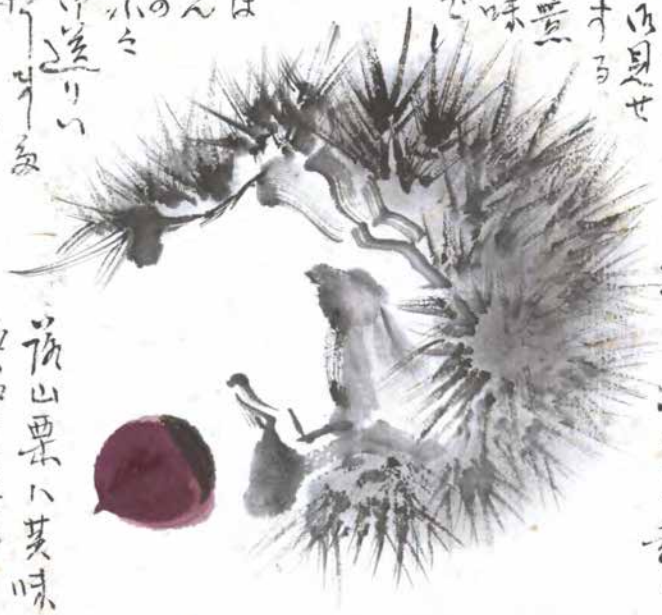
栗中の最たる

ものだと

すきやう

ので

山



郵便はかき



直都市室河二条

南大田中病院

高橋圭介

先生

少所色々熱像して
すすが一寸であるがつき
ませ

直所の近自道と云思ひ
ますかどういふかゆきを
祈りませ

夜も月明気澄み
火さくして畦の小徑を行
くに困りませ

月にそわれらるといふ柄で
もありませしがウイぶら
くと村の夜道を

出さませ



十月二十三日
翠華山
多羅入口

郵便はかき



京都市定所

二条市下

田中病院内

六の森圭介

先生

又々急慢多謝
稿は半分とりナルラ
ルツコアリ歌
大い紅茶が畦道子
目立ちます稲をら
に百千口が響りよ
山には柳紅葉 甲子雀
山雀 山雀エド度リ
来ヨアツル比ある
リ秋の早取中では
門前の細道



二月
十日
明

郵便はかき



京都市室町
二条東南
田中病院内
森圭介
先生

つぎの田はすつ
かり刈り及ぶ
草も
木も江戸草
したか松林
がま月と母立
ちまふ雨相
下り雪
まりに音つ川
まふ





郵便便はか

京都市室所
二条南入
田中病院内
高孫直介
先生

故障やら病元やらその
内へ師走になつてしまひ
すつかり申上信をさうな
しまひ申し候

申上つたは平々ひあ

秋のうつり替りり知らせした
つやも御山有った候はずが
いつら弓にかたこの山里にな
つてしまひのヨ一毎

東名山のくのぎ林と四十雀

山雀ハ雀あど朝と夕に

渡り来ててのんくわうくと

あやまき矢の山のまじり
立ててお



十二月十七日

後山小景

郵便便



京都市上ノ京
宝町ニ下南大
田中病院由

高橋直介
之五

世の中は大分あ
わたりしくなつてい
るようだが山村
はその如く阿の夏
化もありませぬ
山は木を川には
大根を洗つていな
あ



大板あらし
十二月廿五日

郵便はき



白部町中室町

二本木南大

田中 病隠内

高橋圭介

先生

如揚々環味所送所
 志懐く感謝しませ 早速
 詩合しさし〜貴ひまいたが流
 石子若狭まのは品格がちが
 いませ 田舎ではめつた子口
 に出来ませぬもの 一入り美
 味しく〜さいます〜
 今令やは秋の永雨で昔も柿
 もあつかりやりそくなつ何
 も甲目にかける事が出来ませ
 せ〜でした 初
 一昨取来の雪が、さ〜く積り
 ました神強布が怖くて山を
 歩かまつたのは、多〜くでした

十二月
三十日



郵便はかき



高松市定町二条南大

田中病院

高松市定町二条南大

正 加



庚子刻畫

年
寫



郵便はか

東京市定所
二条南入
田中病院内
高橋圭子
先生

朝陽くさくさかた
誠たよき之且と
迎へました
新生の小詞へ
四十元の所人が
つるかつての詣り
をす子染硝子越
しにあかめまよと
物詠りの目つて
あるよくです

昭和五年

一月二日 翠華山 坊



きかは便郵



京都市宝所

二条南十

田中病後

二の森連

内
之生

つまらぬ徒らや初

め出し毛筆に意

かつてつましぬのび

すつかり忌幅又

この罪輕からかど

怎縮していまあ

春立ちから寝んさ

汗之返りふんえ

上つていまあ後

園の梅のみは去年
に増して之れ采四
分廻り咲き
香りあり

小枝

四



NO.91~97

郵便便か



京都市空町二条南入

田中病院内

吉田 主人 先生

二月廿五日

春光さくらか 春日まことに

のちびすの生のやかりるを

永でやつと舞りまゝ

山路日取塔を

あつてつま

日溜りにはたんぼい

も笑つていま

雪が春渡りをやつて

いま

頭に席斑のもの足下に

この蝶かゝひい

おーと



郵便はかき



京都市室町三丁目

南田中病院内

森田先生



三月六日

雨水取が雨まつてか
やはり空をさがり
あした

出かかつてりた草花
もつた人およろ
気がしよす



摘取つて

来ます

小生も又這子を立てり
あしたでも土字は出た見
えます子供が毎日



郵便はかき



京都市室町

二条南大

田中病院内

室町

先生

春日といへぬ字さき續見ま、
野良も未だ作気まはま
しませし

南日向陽の庭に

は村の老人がやがて使

は教ふありぬのむしど

いば龍巻の年大い

ましてまあり

あし紅梅一ニ輪 祝

つていあり

三月

十七日





郵便便



高知市定所

ニヤホ

痛改内

殊甚介

之生

春日さる京山ついで
只今ナ真ニ盛ナリ
早リモハニ春日を
田園で迎へおす
一所々の様ヲ聞
南ノ庄で糸白糸
と放つておす
御大ボツ

か
あり

三月廿一日
思軒



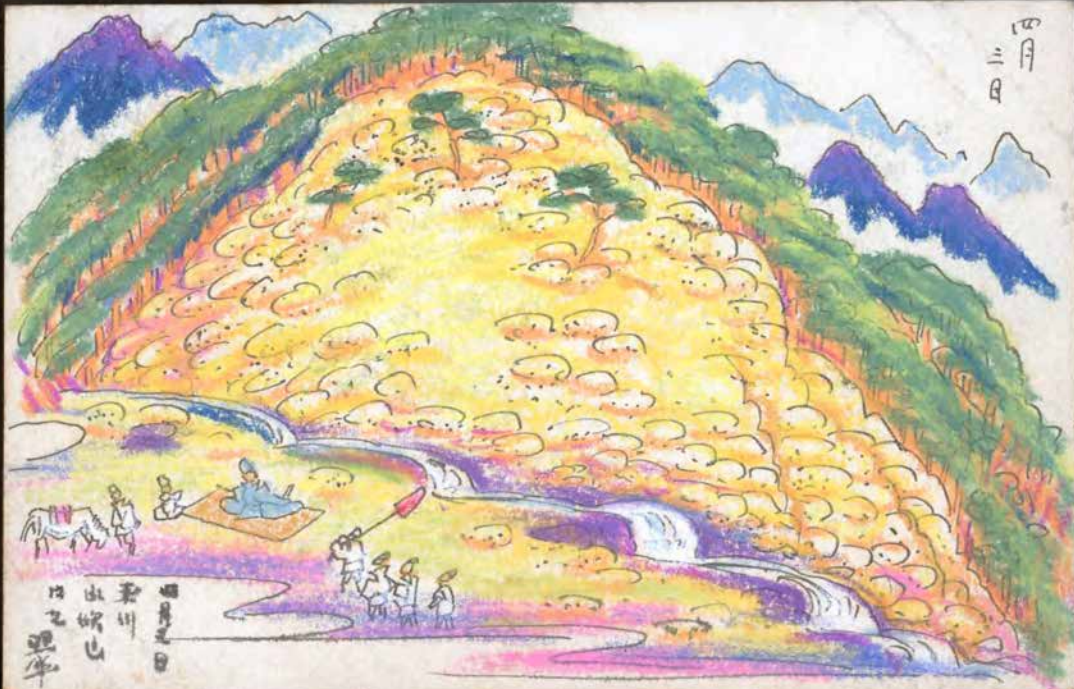


郵便はか

高野山
二茶
田中
山吹
山吹

今日は田舎の春のまつりびき井出の
玉水の里は招かれどたが江と人の嫌いな小
生には驚く迷惑 玉川に沿って三十町の
水上井出左大臣以来の山吹山を探ねました
三竹立を深くわさくした趣一山山吹を以て
満す水といまや 途中山徑の雅趣亦
欄すべく箕面 鞍馬の比はあらぶ 現代
捨てられたる名所人跡絶えておく 宿り
想をほしいおこしたる事が出来まい
水玉のめく清くして曲登 モウ大いには
携めますのこんふ山中に移り住みたい
心も動いていませぬ
小流の徑を令けて上れば 三里半で笠置
の温泉に出るさうであら 笠置道から伊吹
赤目の滝迄この行をやらうと思
つていませぬ

四月
三日



山
川
之
景
也



きかは便郵

京都
南大
室
所
二
条

田中
病
後
雨

兼
吉
介

先生

新緑 午後から
小雨 緑 稍濃く
茶園 新粧
ほと、キ、イ、す、う
初立日と云ふ、川
萩 毎田川、子
蛙 鳴、有、之、川



西月
水
三
年

きかは便郵



高松市定之町二

茶木南

田中病没

庄圭介

芝生

この一日可ら

茶橋一齋

に始めよーた

亦降れは耐ル

はととよ、すそ

ソコ、あり

夢の穂高く

萩と蛙鳴

しきりびあ



五月
八日
翠竹